
武装神姫 孤高の天使

トモヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫 孤高の天使

【Nコード】

N2930BA

【作者名】

トモヒロ

【あらすじ】

ある日、アーヴアルmk・2型のツバサは、何のまいぶれもなく捨てられた。

路頭に迷っていたツバサは自分と同じ境遇のアルトレーネ型のクレアと、黒猫のアーサーと出会い、人間の手から離れていく。

これは武装神姫の二次制作物です。

こういうロボットモノって完全自立キャラとかいるよね〜（ロシヨウとかフォテとか）…というわけで書いてみました。

駄文& a m p・処女作& a m p・亀ですが、よろしくお願ひします。

ep1:「私はアーヴァルmk・2型のツバサといます!」

気が付いたら、目の前は、小汚い裏路地だった。

空きカン、プラスチック、生ゴミ。それらがごちゃ混ぜに詰められたダストボックスの中に、私も、そのゴミ達と一緒に、いるのだと分かった。

そして、今自分がどんな状況に置かれているのか、理解した。

「私は捨てられたんだ…」

その日、私は何も考えず、ただ、声をあげて、この胸を締め付ける
どうしようもない衝動を紛らわすだけだった。

これを人間は『泣く』と言っただろう。

*

気が付けば、日の光がこの裏路地にあるゴミため場を照らしていた。
どうやら、昔の夢を見ていたらしい。

夢と言っても、私は神姫だから人間見たいに本物の夢じゃない。

あの日の事を忘れまいと心に深く誓ったあのメモリ（記憶）が何らかのバグによってスリープモード時にフラッシュバックを起こすという現象でこうなるらしい。

「最悪の目覚めだ…」

「こゃ〜お」

クレイドルから目覚めた私を出迎えてくれたのは、黒猫のアーサーと。

「あ！おはようございます、姉御！今日もまた、ヴァルハラへ行くのですか？」

その鳴き声に詰められたこの元気な子は”黒い”アルトレーネ型のクレアだ。

この子もまた、無責任なマスターに捨てられた神姫だ。

「ああ、あそこじゃレギュレーションなんて関係ないからね。それに博打で自分に賭ければ、それなりに金が貰える」

「でも…」

「仕方ないだろ…私達が生きるにはそれしか無いんだから」

そういいながら、私はマントを羽織り、アーサーへと跨った。

*

そう、神姫である私達が生きる為にはお金が必要だった。

携帯充電池を買うお金、自分の身を守る武装を揃えるお金、たったこの二つの項目をクリアするにも、神姫の私達にとって、絶望的だった。

「…ツク、マスター」

あの頃の私はバカだった。

自分を見限った元マスターを足を引きずってまで探したんだからな。

「…マス、…ター…」

そして、私のバッテリーは底を尽きかけ、目の前が真っ暗になった。

*

「にゃあ…」

次に目が覚めると目の前には、自分の白いカラーとは逆の真っ黒い猫が顔を覗かせていた。

アーサーだ。

ちなみにこの時、名前はまだ決まっていなかったな。

ペロツ

「きゃあ!？」

アーサーは私の汚れた顔を舐めまわした。

「ここは？」

そこは今後、私の生活拠点となるゴミため場だった。

そのときの私はそんな事、思っても見なかったが…。

とりあえず私は、自分が寝ているクレイドルから起き上がった。

クレイドルに刺さっていた携帯充電池がまだ残っていたらしく、私のバッテリーは三分の二は回復されていた。

「貴方がココへ連れてきてくれたの？」

アーサーは私の言葉が通じたのか、コクンと頷いた。クレイドルといい今のといい、何て賢い猫なんだ…。

「ありがとう」

「にゃ〜」

そして私はそれだけを言ってその場を立ち去った。

アーサーとはそれっきりの関係だと思っていた。
私は、捨てられた場所から、マスターの家までそう遠くは無い筈。
そう思つて、マスターの元へ帰るために再び歩き出した。

*

しかし現実には私に絶望しか与えてくれなかった。

「……………あ、ああ…あ」

かつてマスターがいると思われた。マスターと私が共に過ごして来た家は跡形もなく消え去っていた。
上を見上げれば、そこには『売地』と書かれたプラカードが突っ刺してあった。

「あの！」

「ん？」

私は咄嗟に通りがかった人を呼び止めた。

「あの、ここに住んでいた住人は…？」

「住人？さあ、俺が始めて見た時はもう空き地だったぜ？」

何かの間違いだ。そう信じたいと思つていた。だが、その思いは、私を覆いかぶさってきた新聞紙よつて砕かれた。

『2050年（平成62年）1月1日…』

私が捨てられてから10年の月日が流れていた。

私は何時の間にかまた、あのゴミため場に戻ってきていた。何故か分からないが、私の身体が無意識にココへ足を運んだ。その中央に一匹の黒猫が物静かに座っている。

アーサーは私が戻ってくるのを知っていたかのように、こちらを見ていた。

「にゃあ」

その時、私にはアーサーが『おかえり』と言っているようにみえた。

「ただいま」

だから私はそう返した。

アーサーが私に歩み寄る。私はアーサーを抱き寄せ、気の済むまで『泣いた』。

アーサーはただ一度「にゃあ」と鳴いて、あとは私にされるがままになっていた。

*

マスターに捨てられた神姫は大概路頭をさまよい、バッテリー切れをおこして、その存在を忘れ去られたまま。永久に機能を停止させる。

（私もこのままここで朽ちるのかな）
それも悪くない…と思い始めた刹那。

「きゃあああああああああああああああああ！！！？」

「「!？」」

どこからか、悲鳴が聞こえた。
それも遠くない…。

「きゃあ!？」

次の瞬間に私はアーサーの背中に乗せられていた。

アーサーは一気にトップスピードでビルの裏路地を駆け巡り、フェンスを越え、瞬間に悲鳴が聞こえた現場に着いた。

そこに見えたのは、地面に尻餅をつくアルトレーネ型とそのマスターらしき柄の悪い男だった。

「ど、どうしてなのです?! マスター! どうしていきなり『いらない』などというのですか?!」

「ああ? まあ、テメエに飽きたつてところかな? もう旧式のテメエを使っても勝てる筈ねえし、古りいモンより新品のおにゅーの方がいいに決まってるんだろ」

「そ、そんな…」

陰からコツソリその会話を聞いていた当時の私は絶句した。

私達、神姫をまるで、ただの”物”の様に扱う事に…。
確かに、神姫は人が作り上げたオモチャだ。だけど…。

「ひ、ひどいのです…。私達は、『心』があるのですに…」

そう、神姫には『心』がある。喜んだり、悲しんだり、怒ったり、生きていく上で必要な感情という『心』が。しかしその男は…。

「『心』お? ……なあにバカな事言ってるんだテメエ?」

「馬ツツツツツツツ鹿じゃねえの?!」

刹那。私の中から何かが弾けた。

*

その後、何が起こったのか覚えていなかった。
気が付けば、何時の間にか、男は倒れていて、私はその上に乗っ
いて…

(私が…やったの?)

何がなんだか…。

アーサーはノロノロと今頃やって来た。

「あ、あの…」

ハッと我に返ると、アルトレーネ型の子がアーサーの隣によって来
た。

(そういえば、この子も捨てられたんだ)

「私のマスター…大丈夫でしょうか?」

「ッ!? マスター何かじゃないよこんなヤツ!」

「!?!?」

「こんなヤツがマスターであってなるものか!」

私はつい怒鳴ってしまった。

「……………ゴメン」

「あ！いえいえなのです！そんな事無いのです！危ない所を助けて頂いて、どうもありがとうございます！」

「……いえ、貴方はこれからどうするの？」

「え？」

「もうこの人の所へは帰れないんだよ」

「そ、そんな事……」

「……」

「……」

少しの間、沈黙が流れた後、私はある提案を思い切って言うてみた。

「私と一緒に来ない？」

「へ?!」

「私も捨てられたんだ。自分勝手な人間に、だからさ、捨てられた者同士、私達だけで自由に生きてみない？」

「あなたも!？」

「そう!どうかな？」

「……」

急過ぎたかな?と少し後悔するがその子の答えはすぐに聞いた。

「……うん、分かったのです!私は貴方のついて行くのです!」

「うん!よろしくね!え〜っ」と……」

「クレア!アルトレーネ型のクレアなのです!」

「私は……」

「にゃーお」

「わあ!?!き、君は……」

「はうあ!?!かわいい猫さんなのです!ほーれほれ『アーサー』」

「アーサー?」

「この猫さんの名前なのです!今決めました!」

「そ、そう…」

これが、私とクレアとアーサーとの出会いだった。

「私はアーンヴァルmk・2型のツバサといいます！」

ep1:「私はアーンヴァルmk・2型のツバサといます!」(後書き)

次回バトル!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2930ba/>

武装神姫 孤高の天使

2012年1月7日17時07分発行